

REPORT 2012

2012年度活動報告書

世界自然遺産
知床を未来へ

皆様からのご支援が、
知床の自然保護活動を
支えています。



知床財団

SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

Contents

2012年度年次報告書に寄せて

2012年度の決算概要

2012年度の賛助会員の状況

2012年度の寄附状況

【公益事業】普及啓発事業

-  地域向け環境教育
-  野生生物学習教材トランクキットの作製と運用
-  職員研修
-  ボランティア活動の推進
-  人材育成・就業体験の受入
-  情報発信・サポーターの拡大
- JBN業務
- 講演会運営・啓発資料作成

【公益事業】施設管理事業

-  ビジター向けインフォメーション
-  知床自然センター内外刷新業務
- 知床自然センター等の管理運営
- 羅臼ビジターセンターの管理運営
- ルサフィールドハウスの管理運営

【公益事業】調査研究・野生動物対策事業

-  エゾシカ個体群の動態に関する調査
-  知床の暮らしと生き物を守る電気柵導入試験
-  ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査
-  岩尾別地区におけるヒグマの生態等に関する調査
-  希少鳥類などの長期モニタリング
-  海生哺乳類のモニタリング
-  水域における生物群集のモニタリング
-  学術的な交流と成果公表

 シホテ・アリンとの世界遺産交流

 酪農学園大学との連携協力

ヒグマの管理対策

自然環境の管理対策

エゾシカ関連業務

外来生物の調査・対策

地域住民とヒグマの安全安心共存プロジェクト

遺産地域調査業務

科学委員会等運営業務

【公益事業】公園利用管理事業

知床五湖利用適正化業務

適正利用・エコツーリズム検討業務

カムイワッカ地区利用適正化業務

【公益事業】森林再生事業

しれとこ100平方メートル運動森林再生業務

 しれとこ100平方メートル運動普及推進業務

【収益事業】

販売・有償貸出

羅臼研究支援センターの維持管理

研修実習の受入

【財団管理運営事業】

【組織概要】

 目次、本文中にあるマークは、寄付金・賛助会費によって実施している事業であることを示しています。

■知床財団の使命

私たち知床財団は知床半島をホームグラウンドとし、世界遺産知床の自然を守り、より良い形で次世代に引き継いでいきます。

野生動物やその他の自然環境の保全・管理に携わる組織として常に先駆者であり続け、人間が自然と親しみ調和していける社会の発展に寄与します。

2012年度年次報告に寄せて

公益財団法人 知床財団 理事長 関根郁雄

公益財団法人として2年目となる2012年度は、斜里・羅臼両町で例年以上にヒグマの出没が多発し、職員は昼夜を問わずその対応に追われました。例年であれば初夏の繁殖期を過ぎ8月に入るとヒグマの出没は一旦落ち着きますが、昨年は8月以降むしろ増加しました。さらには衰弱や餓死したヒグマが報告されるなど、ヒグマに関する知見に関しては蓄積のある知床でも過去にない事例を経験することとなりました。

このような状況の一方で、道路沿いに投棄されたゴミを漁るヒグマや、車からヒグマに餌を投げ与える観光客、数メートルの至近距離までヒグマに接近して撮影するカメラマンの姿が目撃され社会的にも話題となりました。ヒグマをはじめ野生動物に接する際の人側のマナーに起因しておきる問題は人側の努力で解決できることであり、私たちはこれまでもこの問題に注目し、解消を目指して様々な取り組みを行ってきました。地域住民に対しては学校でのヒグマ授業や講座の開催など、知床を訪れる観光客に対しては、知床自然センターや羅臼ビジターセンター等、各施設におけるミニレクチャーやスライドレクチャーなどを通じて野生動物と接する上で必要な基礎知識の提供などを行うことで、マナーの向上を訴えてきました。これらの活動に関しては、皆さまからの会費や寄附によるご支援で実施しているものが多数あります。あらためて感謝申し上げる次第です。

また、知床五湖では自然公園法の利用調整地区制度に基づく利用システムの運用が2年目を迎えました。他のエリア同様ヒグマの出没が相次ぎ、特に8月は地上歩道の閉鎖が続きました。一方で閉鎖されることのない高架木道の認知が進み、年間を通じた五湖の来園者数は前年よりも増加、新

制度導入が安全で安定的な園地利用に寄与したとも言えます。私たちは制度の運用現場を担う指定認定機関として試行錯誤をしながらも、よりよい仕組み作りに貢献していきたいと考えています。

近年、ヒグマと並んで野生動物対策の主軸となっているエゾシカ対策業務に関しては、今年度も遺産地域内外における捕獲事業を行いました。継続した捕獲事業を行ってから6年目となる知床岬地区では目標を達成しつつあり、海岸草原ではシカの採食によって裸地化していた箇所が再び緑に覆われ、全般に草丈が高くなるなど、その成果が目に見える形で表れてきています。シカ対策事業で知床のように着実に成果を挙げている事例は全国的にも稀有で、私たちがこれまで蓄積してきた知識と経験が少なからず活かされた結果ではないかと自負しています。

知床の自然は、ヒグマやエゾシカをはじめとする野生動物と人間の関係ひとつとっても、日々変化しています。私たちは知床の自然環境を守る担い手として、現場でその変化を感じ取りながら進む方向を定め、歩みを続けます。今後とも、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

関根 郁雄 Ikuo Sekine

北海道斜里郡小清水町出身。斜里町政に長く関わり、日本のナショナル・トラスト運動の草分けとなった『しれとこ100平方メートル運動』スタート後の昭和54年度からは、企画振興課長として、この運動を精力的に推進した。その後も斜里町助役、副町長を歴任。平成5年には知床の世界遺産登録を提案、当時の午来町長とともに登録に向けた取り組みに邁進し、知床の自然保護活動の歴史に新たな1ページを刻んだ。

歴代理事長及び任期

藤重千秋 1988年9月23日～1997年9月23日
法量 武 1997年9月24日～2003年3月31日
森 信也 2003年4月1日～2009年3月31日
関根郁雄 2009年4月1日～

2012年度の決算概要

2012年度の総事業費は2億5千444万円

知床財団の事業費は「独自事業」、「斜里町・羅臼町委託事業」、「その他委託事業」の大きく3つに分類されます。中でも、独自事業は賛助会費や寄附金が重要な財源となっています。賛助会員をはじめとする多くの方々の継続的なご支援により、2012年度は全72事業を行いました。

1. 独自事業

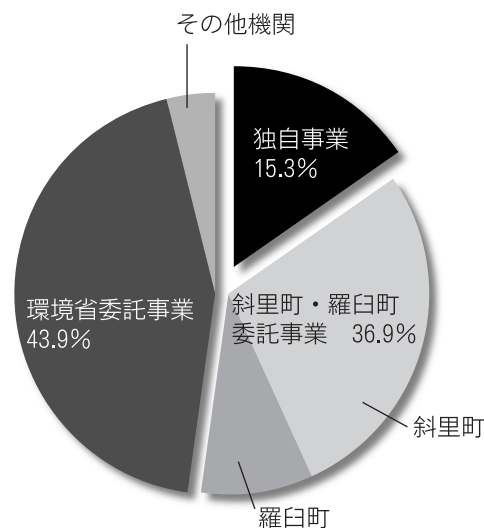
(事業数28 事業費3千890万円)

賛助会費や寄附金の他、知床自然センターおよび羅臼ビジターセンターでの販売物収入が主な財源となっています。

2. 斜里町・羅臼町委託事業

(事業数14 事業費9千522万円)

斜里町からは、知床自然センターや知床自然教育研修所などの指定管理業務やしれとこ100平方メートル運動の現地業務などを受託し、羅臼町からは羅臼ビジターセンターやルサフィールドハウスの運営業務を受託しました。また両町からヒグマ管理対策業務、自然環境保護管理対策業務をそれぞれ受託しました。



3. その他委託事業

(事業数30 事業費1億2千032万円)

環境省やその他機関から、各種業務を受託しました。

2012年度の決算報告

科	目	金 額	科	目	金 額
I 一般正味財産増減の部			(1)経常外収益		
1. 経常増減の部			その他特別収益		305,253
(1)経常収益			経常外収益計		305,253
基本財産受取利息		16,544	(2)経常外費用		
事業費収益		215,549,802	経常外費用計		0
寄附金		19,044,526	当期経常外増減額		305,253
普及研修費収益		17,575,844	当期一般正味財産増減額		12,898,322
その他の事業費収益		358,260	一般正味財産期首残高		64,017,148
雑収益		1,907,778	一般正味財産期末残高		76,915,470
経常収益計		254,452,754	II 指定正味財産増減の部		
(2)経常費用			受取指定寄附金		14,622,197
事業費		239,249,722	一般財産へ振替寄付金		-11,560,472
管理費		2,609,963	当期指定正味財産増減額		3,061,725
経常費用計		241,859,685	指定正味財産期首残高		48,972,472
当期経常増減額		12,593,069	指定正味財産期末残高		52,034,197
2. 経常外増減の部			III 正味財産期末残高		128,949,667



<http://www.shiretoko.or.jp/about/outline/teikan>

2012年度の賛助会員の状況

私たち知床財団の活動は、賛助会員をはじめとする多くのサポーターの皆様に支えられています。2012年度は新たに78名、14団体の方にご入会いただきました。皆様の多大なご支援に対しまして心から厚く感謝と御礼を申し上げます。

なお、当財団への会費は、所得税、住民税、および相続税における優遇措置を受ける対象となります。詳しくは当財団ホームページ、または税務署にお問い合わせください。

URL <http://www.shiretoko.or.jp/supporter/zei/>

(1) 2012年度の会員数

個人年会員	個人終身会員	法人年会員	法人特別年会員
716名	1,045名	49団体	5団体

(2) 新規入会

個人年会員65名、個人終身会員13名、法人年会員13団体、法人特別年会員1団体の入会がありました。

【法人年会員】

広島フットケア、いるかホテル、株式会社 大石アンドアソシエイツ、知床アルパ株式会社、株式会社スタンフット、ピックス株式会社、民宿 鷺の宿、北海道通運業連合会、東北通運業連合会、新潟通運業連合会、知床クルーザー観光船 ドルフィン、田島公認会計士事務所、サージミヤワキ株式会社（敬称略）

【法人特別年会員】

Hoyu Global Group（敬称略）

(3) 法人特別年会員一覧

法人名	所在地
商船三井フェリー	東京都
シーライヴ株式会社	大阪府
エース株式会社	東京都
光和メディカルクリニック ヘルスケアセンター	東京都
【新】 Hoyu Global Group	ジャカルタ

※【新】は2012年度の新規入会法人

2012年度の賛助会員の状況

(4) 法人会員一覧

法人名	所在地
知床グランドホテル	北海道
オリジナル設計株式会社	北海道
株式会社 ユートピア知床	北海道
株式会社 ノーベル	岐阜県
株式会社 須田製版 釧路支店	北海道
三井農林株式会社 総務部	東京都
有限会社 しれとこ村つくだ荘	北海道
株式会社 河面組	北海道
横浜ブナ林法律事務所	神奈川県
おのクリニック	千葉県
国民宿舎 桂田	北海道
たいせつゼミ	北海道
有限会社 アウトバック	岩手県
武庫川女子大学附属高等学校	兵庫県
知床オプショナルツアーズ	北海道
株式会社 ネオアローム	東京都
有限会社 みさき水産	北海道
有限会社 赤岩水産	北海道
株式会社 知床プリンスホテル	北海道
岩尾別ユースホステル	北海道
羅臼漁業協同組合	北海道
ウトロ漁業協同組合	北海道
知床ナチュラリスト協会	北海道
オコツク漁業生産組合	北海道
株式会社 辻中商店	北海道
有限会社 木切別漁業	北海道

法人名	所在地
峯浜水産有限会社	北海道
株式会社 リリーネット	広島県
医療法人 慈久会 旭が丘ファミリークリニック	三重県
有限会社 知床ネイチャークルーズ	北海道
フロンティア株式会社	北海道
有限会社 らうす第一ホテル	北海道
蔭山 昌代	神奈川県
ナチュラル株式会社	福岡県
株式会社 グッドマンサービス	東京都
株式会社 秀岳荘	北海道
株式会社 フェニックス	東京都
小川建設株式会社	北海道
【新】広島フットケア	広島県
【新】いるかホテル	北海道
【新】株式会社 大石アンドアソシエイツ	東京都
【新】知床アルパ株式会社	北海道
【新】株式会社 スタンフット	東京都
【新】ピックス株式会社	北海道
【新】民宿 鷺の宿	北海道
【新】北海道通運業連合会	北海道
【新】東北通運業連合会	宮城県
【新】新潟通運業連合会	新潟県
【新】知床クルーザー観光船 ドルフィン	北海道
【新】田島公認会計士事務所	東京都
【新】サージミヤワキ株式会社	東京都

※【新】は2012年度の新規入会法人

2012年度の寄附状況

一般寄附としてお寄せいただいた件数は68件、総額7,507,740円にのぼりました。内、個人の方からは66件、法人からは2件でした。また、寄附金で実施される事業を指定できる指定寄附としては、3法人より総額14,622,197円ご寄附いただきました。ご支援いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

(1) 一般寄附をいただいた法人

法人名	金額(円)
知床オブショナルツアーズ	30,000
北のアルプ美術館	100,000

(2) 指定寄附をいただいた法人

【ダイキン工業株式会社 寄附額：9,500,000円】

ダイキン工業株式会社様より知床財団・斜里町・羅臼町に対し、5年間で総額1億1千万円のご寄附をいただく四者協定は2年目を迎えました。2011年度に引き続き、知床財団は斜里町・羅臼町と協力しながら以下2つの事業を実施しました。

- ・「カツラの森、命あふれる川の復元」事業 (p34、p36参照)
- ・「知床の人とヒグマの共存」事業 (p20、p29参照)



【アサヒビール株式会社 寄附額：5,000,000円】

アサヒビール株式会社様からアサヒスーパードライ「うまい！を明日へ！」プロジェクト第6弾としてご寄附いただきました。このプロジェクトは「アサヒスーパードライ」対象商品の売上げの一部を自然環境保全活動に役立てていくものです。今回のご寄附を受け、以下の事業を進めています。

- ・「知床の大切さ、楽しみ方を伝える」事業 (p15～16参照)
- ・「知床の暮らしと生き物を守る」事業 (p19参照)
- ・「知床でつながる交流の輪」事業 (p23～24参照)



【公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟 寄附額：122,197円】

日本ユネスコ協会連盟主催の「プロジェクト未来遺産」に賛同しているレクサス様より、知床財団が企画した「ヒグマ学習教材トランクキット」に対し「2012年度レクサス特別賞」としてご寄附いただきました。レクサス特別賞はエコドライブをサポートする先進機能「ハーモニアスドライビングナビゲーター」により、レクサスのオーナーのエコドライブ情報がポイントとして蓄積され、そのポイントがレクサスオーナーが選んだ登録団体の活動に寄附されるものです。



公益事業 普及啓発事業

地域向け環境教育

地域が支える世界遺産・知床を目指して、知床の自然とその自然に携わる人々の活動をより深く知ってもらう機会を、様々な形で地域に提供しています。

(1) 学校教育

斜里町の学校

ウトロ小中学校の全校生徒を対象にヒグマに関する授業を実施しました。毎春恒例となっているこの授業は、ヒグマに出会った時の対処法を中心に、様々な切り口から身近な自然に対して子供たちが想像したり、発見したり、そして自分たちで考えてみたりする手伝いとなるよう毎回スタッフが趣向を凝らして行っています。また総合学習の一環として、夏に中学校1年生を対象としたポンホロ沼への野外授業を、冬に小学校1年生から6年生を対象とした環境教育授業を行いました。

ウトロ小中学校の他に、峰浜小学校、川上小学校の各全校生徒を対象にヒグマについての授業を行いました。



▲峰浜小学校でのヒグマ授業

羅臼町の学校

羅臼町では、中学校・高校一貫教育のカリキュラムとしてヒグマの生態や遭遇時の対処法などについての授業を引き続き行うとともに、従来の野外生態調査の体験に加え、ヒグマ目撃時の通報の方法を実践するプログラムを取り入れました。羅臼町以外では浜中町姉別小中学校の全児童・生徒、そして別海町野付幼稚園の全園児を対象としたヒグマについての授業を行いました。

また、羅臼町内の小学生を対象に実施している知床キッズ（羅臼町ふるさと体験教室）を羅臼町教育委員会や環境省と共催で計10回の企画・運営を担いました。



▲知床キッズ「ルサ川での川遊び」



▲羅臼のヒグマ授業でヒグマの毛皮にさわる子供たち



▲ウトロ中学校の野外授業

(2) 一般向け講座・イベント

ウトロ中学校の初任教諭2名を対象に、地域の自然や野生動物と地元住民が共存していくうえでの課題や取り組み、知床財団の活動について研修を実施しました。

また、知床博物館と共催で毎冬行っている知床

自然史講座は今年で6年目を迎えました。2012年度は「魚のキモチ」と題して、魚と人とのかかわりの歴史や魚類の生態について知床財団職員を含む講師6名による講座を開催しました。

野生生物学習教材トランクキットの作製と運用

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟様からの助成金によるヒグマ学習教材トランクキット2号機が2012年4月に完成、5月から貸出運用が開始され、7件の利用がありました。また、株式会社AIR DO様のご支援によって作製した1号機は9件の利用がありました。利用者からは、「本物が入っていることで、関心を持ってもらいやすい」「プログラムを理解しやすく、初心者でも使いやすい」といった感想をいただきました。



▲トランクキット2号機でのヒグマ授業



▲ダイキン工業株式会社の社員による防鹿柵設置のボランティア

職員研修

知床財団のホームページを適正に管理、アップデートし、情報発信力を高めることを目的とし、HTML/CSS活用やレイアウトの実装方法、デザインルールなどの基礎的な知識を習得する研修に職員1名が参加しました。ウェブサイトを有効に活用することによって、知床財団の活動をよりタイムリーに、そしてより多くの方々に知っていただくことができます。

2011年2月から協定を結んでいる旭川市旭山動物園にて知床財団職員2名の職員研修を実施しま

した。研修では、知床のフィールドで使用するためのヒグマ対策用ゴミ箱の実験を行ったほか、傷病鳥獣対応への応用を視野にいれた動物の飼育実習を体験しました。また、園内にリニューアルオープンした「道産動物舎」に知床財団のPRコーナーを設け、知床財団の活動紹介パネルを作成、設置しました。



▲旭山動物園での研修でワシ舎の引っ越しを手伝う職員



▲苗畑の草取りボランティア



▲教育教材の補修ボランティア

ボランティア活動の推進

森づくり作業や普及活動を登録ボランティアの皆様にお手伝いしていただいています。

(1) ボランティア参加者

知床の自然のために何かしたいというボランティアの登録者数は148名となりました。「100平方メートル運動の森・トラスト」の現場での森づくりや羅臼ビジターセンターを拠点にした遊歩道整備などに道内外から46名の参加がありました。総活動日数は71日間、のべ参加人数は139人におよびました。

(2) ダイキン工業株式会社のボランティア

ダイキン工業株式会社様からのご支援の一環として、5月と10月に社員ボランティア計23名の方々にお越しいただき、それぞれ3泊4日の日程で森づくりのお手伝いをさせていただきました。5月はカツラの木の移植、10月は岩尾別川の河畔林再生のための防鹿柵の拡張などを行いました。

人材育成・就業体験の受入

環境教育や調査研究、公園管理の現場で活躍する人材育成を目的としたインターンシップ（就業体験）の受け入れを行いました。主に野生動物や自然環境を専攻する全国の学生から応募があり、夏冬合わせて11の教育機関から計15名を受け入れました。2012年度からは冬期間の受け入れを本格的に実施し、実習生に対しエゾシカ捕獲事業など野生動物管理の最前線の現場を体験できる機会を

提供しました。

また、2011年度に引き続き、旭山動物園職員の知床における職員研修を受け入れました。旭山動物園の職員が知床財団の業務経験を通じて知床で野生動物と人がどのように関わっているのかを肌で感じてもらい、旭山動物園での展示や一般の方へのレクチャーに活かしてもらえるような研修の実施に努めました。



▲エゾシカの下顎処理をするインターン生

受入先（夏期）	件数
立命館大学	1
札幌科学技術専門学校	1
東京農業大学	1
首都大学東京	1
広島大学	2
東京農工大学	1

受入先（冬期）	件数
北海道大学	3
北海道エコ・動物自然専門学校	1
東京農工大学	1
酪農学園大学	1
長野県立林業大学校	1
日本大学	1



▲地元町民向けの「知床財団だより」

情報発信・サポーターの拡大

ご支援いただいている賛助会員向けに会報誌を発行したほか、知床財団の活動をより多くの方々に知っていただくために、地元住民向けや旅行者向けに印刷物の発行や施設展示、ホームページなど様々な媒体を使って活動紹介を行いました。

（１）地域向けの情報発信

身近な自然情報やイベント情報の紹介を通じて地元の皆様に知床財団を知っていただくとともに、私たちならではの情報をタイムリーに発信するため、「知床財団だより」を2ヶ月に1回、斜里・羅臼両町の広報誌に折り込みました（発行部数／回：斜里町5,050部、羅臼町2,050部）。

また、2011年度に引き続きスライドレクチャーや企画展示、季節ごとのイベント等知床自然センターの最新の取り組みを紹介する「知床自然センターだより」を作成し、地元宿泊施設および観光関係施設（全26施設）に配布しました。

（３）ホームページによる広報の強化

知床財団の活動に対する理解と支援の輪を広げる「伝える活動」の主軸として、ホームページでの情報発信を随時行いました。また、より利用しやすいわかりやすくするため、ホームページ全体の再構築を進めました。2013年度には知床財団（組織）と知床自然センター（施設）のホームページがそれぞれ独立、リニューアルして稼働します。

（２）旅行者向けの情報発信

旅行者に対し知床財団の活動を紹介するため、会報誌SEEDSを斜里・羅臼両町の宿泊施設に配布し、宿泊客が自由に閲覧できるようにしました。さらに、旭川市旭山動物園内の図書館にて、賛助会員募集のパンフレットや会報誌SEEDSのバックナンバーファイルを常設させていただき、知床財団活動のPRや賛助会員拡大を行っています。

（４）賛助会の運営

入会状況は、個人年会員65件、個人終身会員13件、法人年会員13件、法人特別年会員1件でした。賛助会員向けの会報誌「SEEDS」は、年4回の季刊化、オールカラー化から2012年度で4年目をむかえました。よりよい紙面づくりのために、会員の皆様の会報誌に対するニーズを把握するアンケート調査を実施しました。



▲賛助会員向けの自然情報誌「SEEDS」



▲地元のホテルや施設に配布する「知床自然センターだより」

(5) 寄附拡大推進事業

知床自然センター内に設置されている募金箱に寄せられた募金額は514,457円、前年比124%（2012年度の知床自然センター入館者数は125,234人で前年比103%）でした。また、一般寄附としてお寄せいただいた金額は、合計1,141,500円となりました。

指定寄附としては、アサヒビール株式会社様より500万円、ダイキン工業株式会社様より950万円をいただきました。

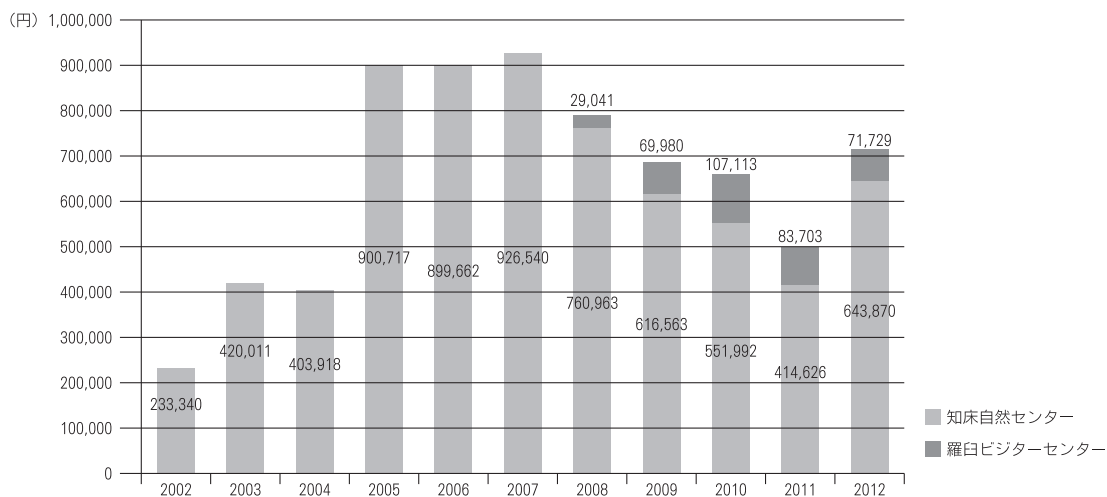
知床財団が活動していく上で柱石となっている募金や寄附などの継続的支援への重要性を広く発信するために、知床自然センターでの館内展示や、

ホームページ内での賛助会員募集や寄附の呼びかけ、寄附のお礼の掲載なども行いました。



▲知床自然センターの募金箱

募金箱への寄附額の推移



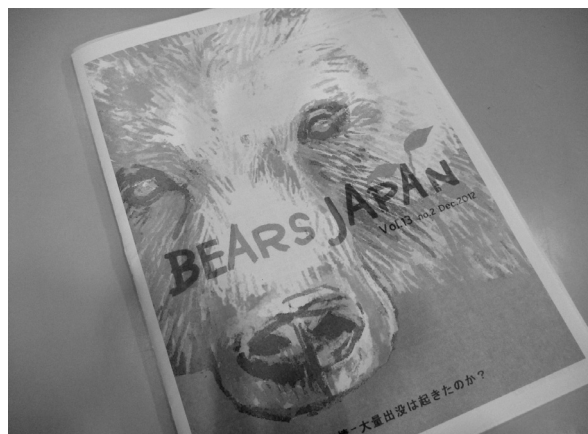


JBN業務

日本クマネットワーク（JBN）からの受託業務として、会員向けニュースレター「Bears Japan」の発行・発送を3回（各350部）行うとともに、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」の発行・販売、JBNホームページの管理を随時行いました。

■日本クマネットワークとは

個人や地域ごとの活動だけでは解決の難しい全国レベルの諸問題や国際問題に関し、必要に応じて社会に対して働きかけを行い、人とクマのより良い関係を構築する活動を行っているNGO組織です。会員は専門家やクマに関心を持つ一般市民、およそ370名で構成されています。



▲JBN会員向けニュースレター

日本クマネットワーク **Web** <http://www.japanbear.org/cms/>



▲町民による知床岬での外来種駆除の様子



▲しれとこ科学教室の様子

講演会運営・啓発資料作成

(1) シマフクロウ関連

シマフクロウとの共生のための啓発資料の作成と公開座談会の開催を行いました。啓発資料の作成では、シマフクロウの基本的な生態や知床における生息状況、保護の取り組みや問題点などをまとめた約10分間の映像を作成しました。作成された映像はDVDとして各所に配布するほか、2013年度からは羅臼ビジターセンターでも上映しています。

また、1月26日には、羅臼町公民館において地域住民を対象とした公開座談会「わたしたちの町のシマフクロウ」を開催しました。第一部の基調講演はNPO法人シマフクロウ・エイドの菅野正巳氏にご講演いただき、第二部は「羅臼町にとってのシマフクロウとは？」と題したパネルディスカッションを行いました。町内外から53名の参加者を数え、シマフクロウに対する意識の高さが伺えた座談会となりました。



▲シマフクロウ座談会の様子

(2) 各種講座・イベント

斜里町で2回、羅臼町で3回、町内在住の方を講師に迎え講座を開催しました。斜里町では、ヒグマをテーマにした連続講座形式とし、羅臼町では、身近なカモメや羅臼岳登山道上の希少な植物、ルサ川をテーマにした講座を開催しました。

また、知床世界自然遺産地域科学委員会より委員の方を講師に招き、斜里、羅臼両町で「しれとこ科学教室」を開催しました。斜里町には、エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループより間野委員をお招きし知床のヒグマ保護管理について、羅臼町では、適正利用・エコツーリズムワーキンググループの庄子委員をお招きし、経済学的視点から知床における観光についてお話しいただきました。

7月には、町民参加による知床岬での外来種防除業務を実施し、16名の参加者とともに、外来種であるセイヨウオオマルハナバチやアメリカオニアザミの駆除作業を行いました。

公益事業 施設管理事業



▲羅臼ビジターセンターでのミニレクチャー

ビジター向けインフォメーション

(1) 知床自然センター

Asahi

情報提供と館内展示

来館者により深く自然散策を楽しんでいただけるようフィールド情報を積極的に収集して提供しました。2010年度から開始した館内の柱を利用した展示は、2012年度も来館者の人気投票の結果を踏まえてリニューアルを行い、質の向上を図りました。また、知床八景や羅臼湖、硫黄山について、手作りの案内展示を作成しました。



▲知床自然センターの柱展示

各種レクチャー

一般観光客を対象とし、知床自然センター館内で様々なレクチャーを実施しました。
館内フロアでは、本物の骨格標本や毛皮、その他

いろいろな小道具などを使いながら、知床の自然の魅力や知床が抱える課題、知床財団の活動などについて、職員が分かりやすく解説する20分のレクチャーを実施しました。ゴールデンウィークは4月29日から5月5日までの7日間で133名の方に、夏休みは7月15日から8月25日までの42日間で558名の方にご参加いただきました。

ダイナビジョン館内にて映像上映後に職員が日ごろ撮りためた写真を使って知床の見どころや野生動物の生態、知床財団の活動などを紹介するスライドレクチャーは、353回実施し5,393名の方にご参加いただきました。

2012年度の夏季繁忙期には、新しい試みとして絵本レクチャーを実施しました。昼休みにダイナビジョン館を無料開放し、館内スクリーンで知床財団作成の絵本、「知床のきょうだいヒグマ『ヌプとカナのおはなし』」を上映した後、知床のヒグマ事情や知床財団のヒグマ対策活動について紹介する30分ほどのレクチャーを48回実施し、397人の方にご参加いただきました。

また、雨の日や観光船欠航日など、知床自然センター館内に多くのお客様が滞留したときに突発的に実施するフロアレクチャーも新しい試みとして実施しました。職員が手作りした様々な館内展示物を15分程で解説しながら、知床の魅力や知床財団の活動を紹介するレクチャーを27回実施し、590人の方にご参加いただきました。



▲知床自然センターでのフロアレクチャー



▲スライドレクチャーの様子

(2) 羅臼ビジターセンター *Asahi*

施設周辺の自然情報やヒグマに関する注意喚起、野生動物に接する際のルールとマナーなどを案内しています。また、従来からの展示を用いた自然解説に、より深みを持たせたミニレクチャーをアサヒビール株式会社様からの支援事業と位置付け実施しました。

ミニレクチャーの内容は、来館者が一番興味を持たれる野生動物の生態についてが大半をしめましたが、近年顕在化してきた野生動物と人との軋轢や、2012年6月にキツネへの餌やりが引き金で起こってしまった観光客の死亡事故を受けた野生動物に対する餌付けの影響など、人間の行動に起因する問題を多く取り入れて実施しました。

実施時期は、特に来館者が多く見込める夏休み期間に集中して行い、計22回実施し、261人の方にご参加いただきました。

(4) 五湖フィールドハウス

知床五湖フィールドハウスでは、知床五湖利用調整地区の指定認定機関として職員が常駐しています。知床国立公園最大の観光スポットの施設として、出来るだけ多くの方に、自然を守りながら安全に楽しんでいただくためのルールの普及に努めています。

2012年度は、知床ガイド協議会と協力し、ガイドツアー情報の充実や当日のツアー参加希望者への受付体制を整備するなど、利用者サービスの向上に努めました。また、ヒグマの出没により、地上遊歩道の閉鎖が多数発生したことから、独自の

(3) ルサフィールドハウス *Asahi*

知床半島中央部地区及び先端部地区へ立ち入る際の留意事項と禁止事項の案内を行うとともに、羅臼ビジターセンターと同様のミニレクチャーを実施しました。

羅臼ビジターセンターで実施した内容と同様のもののほか、施設展示を活用しながら海域や漁業に関するレクチャーを行いました。また、施設が海に面していることから、数多くの鯨類が利用できる羅臼の海の豊かさについてや、羅臼町民による定置網漁や昆布漁、海域と陸域の繋がりが色濃い知床世界自然遺産についてレクチャーを行いました。

ルサフィールドハウスにおいても特に来館者が多く見込める夏休み期間に集中して実施し、計27回、54人の方にご参加いただきました。

レクチャーを積極的に実施し、ルールの普及に努めました。



▲知床五湖フィールドハウス

知床自然センター内外刷新業務

知床自然センター館内にアイランド型の展示物を新たに2つ作成しました。入館促進を目的とした知床自然センター周辺園地の再整備や、大型映像館での上映以外の活用方法を斜里町と連携しながら検討を進めています。

知床自然センター等の管理運営

(1) 知床自然センター等幌別地区の園地施設

知床自然センターおよび周辺施設の維持管理、映像展示館（ダイナビジョン館）の運営と料金徴収等の業務を行いました。2012年度の映像展示

館入館者数は19,958名（前年比111.0%）、売上は6,982,520円（前年比111.7%）で、いずれも前年度を上回りました。

(2) 知床自然教育研修所

ボランティアやインターン、外部研究者が活動する際の拠点となる知床自然教育研修所の維持管理を行いました。2012年度はのべ247名（993泊）の利用がありました。また、知識や技術の向上を図り、学際的な交流を進める「しれとこゼミ」の場としても活用されました。

(3) 知床五湖園地

ヒグマについての安全管理、およびオートキャンプによるゴミの散乱を防止するため、知床五湖園地の入口を夜間閉鎖しました。また知床五湖園地への給水設備の維持管理を行いました。4月上旬に水源地から園地までの通水作業を、また11月中旬に水落とし作業を実施しました。



▲知床自然センターの映像展示館でのしれとこゼミ



▲知床自然センターのアイランド展示



▲羅臼ビジターセンターの新展示

羅臼ビジターセンターの管理運営

来館者への自然情報提供や施設管理とともに、4回の自然観察会と10回の特別展示を行いました。また、館内展示をよりよいものとするため、新たにエゾシカの剥製を展示し、増えすぎた知床のエゾシカの現状や進行中の捕獲の取り組みなどを紹介するパネルを作成しました。さらに、ホームページの改訂作業を随時行いました。来館者数は35,298名で、開館以来最多となりました。



▲羅臼ビジターセンター観察会「熊越えの滝までお散歩」

ルサフィールドハウスの管理運営

知床半島の先端部地区へ立ち入る際の留意事項についての解説や、ヒグマ出没や開花植物についての最新情報を提供しました。知床岬への海岸トレッキングの際の服装や装備をより効果的に示すためのマネキン展示を新設したほか、トレッキングの注意点や難所に関する重要な情報をイラストで解説した冊子を製作しました。4月1日から10月31日および2月1日から3月31日に開館し、来館者数は7,373人で、昨年度比は105%でした。



▲ルサフィールドハウスに新設したマネキン展示

公益事業 調査研究・ 野生動物対策事業

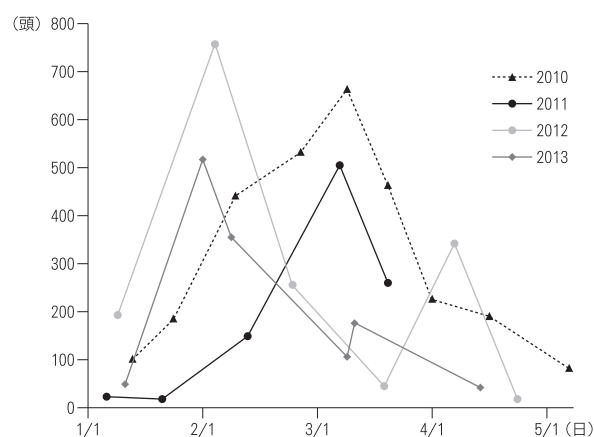


▲ヒグマの学術捕獲

エゾシカ個体群の動態に関する調査

エゾシカ越冬数の増減を把握するため、斜里町真鯉地区での日中カウント調査を2012年12月から計7回行いました。シカの確認頭数は2月が最も多くなり、最大で517頭となりました。最大確認頭数は、2011年度が752頭、2010年度が505頭だったことから、このエリアのシカは依然として多い状態にあるようです。

シカは冬が厳しいと栄養不良により餓死してしまいます。シカの自然死亡数は、その年の冬がシカにとって厳しかったかどうかの目安となります。2013年1月から知床五湖からウトロにかけて確認した自然死亡数は5頭で、ほとんどが前年生まれの子でした。2012年の49頭という数と比較すると、2013年の冬は2012年よりもシカにやさしい冬だったようです。



真鯉地区の国道沿い（約8.5km区間）でカウントされたエゾシカの数

知床の暮らしと生き物を守る電気柵導入試験

(1) 知床岬漁業番屋ヒグマ被害 対策電気柵設置試験業務 Asahi

知床岬先端部にある斜里側文吉湾と羅臼側赤岩地区の漁業番屋では、ヒグマが出没して被害が発生してもすぐに駆けつけることができず対策に苦慮していました。そこでアサヒビール株式会社様からの支援により、番屋にヒグマを近づけないための電気柵を設置しました。文吉湾では湾全体を囲い、赤岩地区では3軒ある昆布番屋それぞれを囲うように設置しました。赤岩地区では漁業者から一定の効果と安心感があつたと報告されましたが、文吉湾ではヒグマが柵の端から海を泳いで柵内へ入ってきてしまうという課題が残されました。

(2) ウトロ高原農地ヒグマ被害 対策電気柵普及業務

ヒグマによる農業被害が多発する地元農家より要請のあつたビート畑への電気柵設置をサポートし、また電気柵の維持管理についてのアドバイスをを行いました。



▲赤岩地区で設置した電気柵



▲DNA採取のための注射筒を麻酔銃を使って発射するスタッフ

▲文吉湾での電気柵設置の様子

▲ワシの営巣木調査

ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査 **DAIKIN**

ヒグマが数多く生息している斜里町ルシャ地区において、観察と写真記録による個体識別と、体毛や体組織の採取による血縁関係推定を行いました。個体識別からは成獣メスが約16頭だったのに対し成獣オスは約3頭と少ないこと、遺伝子分析

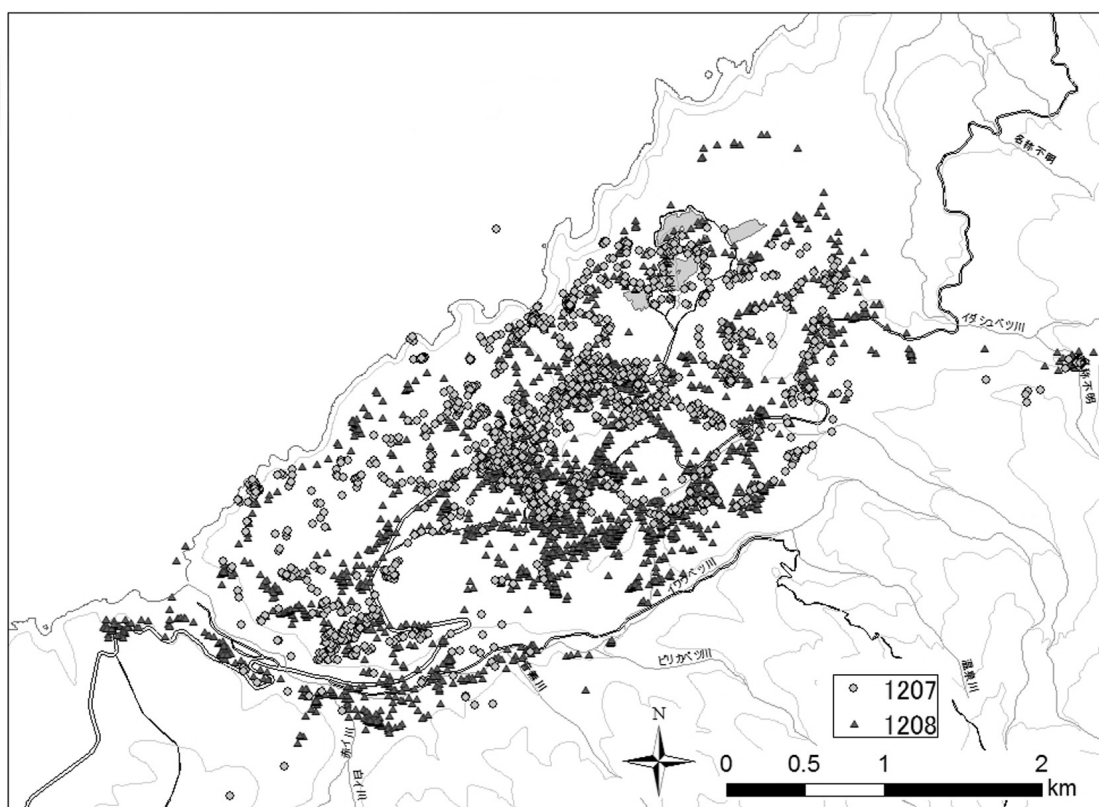
からは遺伝子(ミトコンドリア)の多様性は低いことが明らかになってきました。

なお、この調査はダイキン工業株式会社様との協定に基づく知床財団の独自事業として、知床博物館および北海道大学と共同で取り組んでいます。

岩尾別地区におけるヒグマの生態等に関する調査

ヒグマのメス1頭を箱ワナで生体捕獲し、GPS測位機能を持つ発信機をつけて行動追跡を行いました。位置記録間隔を5分に設定し、ヒグマの37日間の詳細な動きを記録することに成功しました。その結果、このヒグマは1日に約4キロ、1時間に

約200メートルとゆったりと動いていることがわかりました。また、日中は知床五湖の高架木道や観光施設の周辺に近づかない一方で、夜間には道路を歩くという人目を避けて暮らしていた行動が明らかになりました。



▲GPS発信器により判明したヒグマの行動（●2012年7月、▲2012年8月）

希少鳥類などの長期モニタリング

オジロワシの繁殖状況および冬期のオジロワシ・オオワシ飛来状況の長期変動傾向を把握するため、知床半島全体の繁殖状況や羅臼側の冬期飛来数に関する調査を継続して実施しました。また、知床のオジロワシの繁殖状況を調査する人々が集まって形成されている「オジロワシ長期モニタリンググループ」の事務局も引き続き担い、情報の集約と会議の運営を手がけました。

海生哺乳類のモニタリング

冬期に羅臼沿岸にやってくるトドを対象として、陸上調査定点からのカウント調査を継続しました。2012年度冬期の最大確認頭数は、12月29日の131頭でした。2011年度までの数年間は半島基部寄りに多かったのですが、2012年度は半島中央部寄りでも多数確認されました。2012年度は、トドの餌となる生物の分布が2011年までとは違っていた可能性が考えられました。

水域における生物群集のモニタリング

外来魚侵入状況調査

斜里町の岩尾別川、幌別川や羅臼町のチエンベツ川で潜水や水中メガネでの観察を行いました。ニジマスやブラウントラウトなどの外来魚は確認されませんでした。

深層性生物調査

羅臼海洋深層水の汲み上げ施設で収集される生物について、2012年度は特に十脚甲殻類について集中的に調べ、16種を確認しました。

キタムラサキウニ基礎生態調査

2012年10月に知床岬地区の文吉湾でウニの標本採集を行いました。本来分布域がより南であるキタムラサキウニがオホーツク沿岸で増えている可能性があるため、2011年から継続的に調査を行っており、知床ではエゾバフンウニよりもキタムラサキウニが目立つ状態が続いています。

知床博物館所蔵の魚類標本整理

博物館に保管されている未処理標本を整理・同定し、データベース化しました。また、整理の際に古くなった保存液を新たなものに置きかえて、保存状態をよりよいものとした上で収蔵しました。



▲知床博物館の魚類標本（斜里沖で採集後、保管されていたココノホシギンザメ）

▲トドを観測するスタッフ

学術的な交流と成果公表

学会発表（3件）

- Egg brooding in a gonatid squid off the Shiretoko Peninsula.
John Bower（北大院水産）・関勝則（知床ダイビング企画）・窪寺恒己（国立科博）・山本潤（北大FSC）・野別貴博（知床財団）日本水産学会 東京海洋大学（東京） 2012年4月
- 知床世界自然遺産地域におけるエゾシカ個体群管理のための公道を利用したシャープシューティング法の適用について（自由集会：革新的なシカ捕獲をめざして）
山中正実（知床博物館）・石名坂 豪・増田泰（知床財団） 日本哺乳類学会 麻布大学（相模原） 2012年9月
- Egg brooding in a gonatid squid off the Shiretoko Peninsula, Hokkaido, Japan.
John R. Bower, Katsunori Seki, Tsunemi Kubodera, Jun Yamamoto, and Takahiro Nobetsu PICES 2012 Annual Meeting, Hiroshima, 2012年10月

ポスター発表（4件）

- 知床半島ルサー相泊地区におけるエゾシカのシャープシューティング
石名坂 豪（知床財団）・山中正実（知床博物館）・増田泰（知床財団）・鈴木正嗣（岐阜大学）・寺内聡（環境省）日本哺乳類学会 麻布大学（相模原） 2012年9月
- 北海道沿岸海域で採捕されたトドの肝臓及び皮下脂肪におけるダイオキシン類濃度とその組成
山口勝透（道総研・環境）・久保溪女（北大院・環境）・石名坂 豪（知床財団）・三橋正基（道総研・釧水試）・服部薫（水総研・北水研）・田中俊逸（北大院・環境）第21回環境化学討論会 松山市 2012年7月
- Concentration profiles of PCB congeners in Steller sea lion, Hokkaido, Japan.
Keiko Kubo, Katsuyuki Yamaguchi, Wakana Yamada, Tsuyoshi Ishinazaka (Shiretoko Nature Foundation) Masaaki Mitsuhashi, Kaoru Hattori, Shunitz Tanaka 19th International Mass spectrometry conference Kyoto 2012年9月
- クマ科を自然宿主とするブドウ球菌Staphylococcus schleiferiの生態とゲノム進化
佐々木崇（順天堂・医）、椿下早絵（酪農大・獣医保健看護）、植田美弥（横浜動物園ズーラシア）、片山敦司（野生動物保護管理事務所）、山崎晃司（茨城県自然博物館）、葛西真輔（知床財団）、鳥居春己（奈良教大・自然環境）、平松啓一（順天堂・医）日本獣医学会 東京 2013年3月



▲シホテ・アリン自然保護区を訪れた増田事務局長

学術誌

- John R. Bower, Katsunori Seki, Tsunemi Kubodera, Jun Yamamoto, and Takahiro Nobetsu 2012 Brooding in a Gonatid Squid off Northern Japan., Biological Bulletin, 223:259-262.
- Gento Shinohara, Mikhail V. Nazarkin, Takahiro Nobetsu and Mamoru Yabe 2012 A preliminary list of marine fishes found in the Nemuro strait between Hokkaido and Kunashiri island., Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, 38(4), 181-205.
- Kozakai, C. and K. Yamazaki, Y. Nemoto, A. Nakajima, Y. Uemura, S. Koike, Y. Goto, S. Kasai, S. Abe, T. Masaki, and K. Kaji 2013 Fluctuation of daily activity time budgets of Japanese black bears: relationship to sex, reproductive status, and hard-mast availability., Journal of Mammalogy 94(2):351-360.

報告書

藤谷 秀明・野別 貴博・五嶋 聖治（2013）知床半島羅臼沖で採集された深海性十脚甲殻類. 知床博物館研究報告35: 15-28.

高橋英樹・阿部剛史・加藤ゆき恵・小林孝人・佐藤広行・野別貴博・福田知子（2013）北方四島調査報告. 北海道大学総合博物館. 31pp.

シホテ・アリンとの世界遺産交流

Asahi

2012年9月25～27日の3日間にアサヒビール株式会社様からの支援により、ロシアのシホテ・アリン自然保護区の所長を知床に招聘し、各所の視察、知床世界遺産センターでの講演、地元峰浜小学校の児童たちとの交流のほか、知床財団、知床博物館および斜里・羅臼町の環境関連担当部局の関係者等が一堂に会しての今後の交流に向けた協議を

行いました。2013年2月には外務省と環境省が推進する「日露隣接地域生態系保全プログラム」の一環としてウラジオストクで開催されるワークショップへの参加を兼ねてシホテ・アリンを訪問し、現地スタッフと交流、情報交換をすることができました。



▲ロシアのシホテ・アリン自然保護区アスタフィエフ
所長による講演



▲ウトロの海岸に出没したヒグマ



酪農学園大学との連携協力

GIS（地理情報システム）を利用した自然環境モニタリング体制の構築に向けた準備の一環として、アサヒビール株式会社様からの支援で酪農学園大学より講師を招きスタッフ向け講習会を企画、実施しました。講習会では、GISデータの作成、画像への位置情報追加、データの集計、図化、野外でのGPSデータ採取と図化などについて学びました。

Asahi



▲GIS講座の様子

ヒグマの管理対策

人とヒグマの軋轢を回避するため、斜里町および羅臼町内一円のヒグマに関する危機管理対策（出没情報の収集や追い払い、ヒグマを誘引するシカ死体などの回収、電気柵の管理、普及啓発活動など）を実施しました。

斜里町

ヒグマの目撃は2011年度の約2倍、1993年以降で最高の1,763件となり、対策活動も計1,009件に及びました。また、ヒグマの捕獲数（狩猟・駆除など）は22頭となりました。ヒグマによる人身事故はありませんでしたが、人身事故に繋がりがかねない危険な状況が国立公園の内外で多く発生しました。

国立公園内では人を全く気にしないヒグマが頻繁に出没しました。頻繁な出没に関連して観光客がヒグマに餌を与えたり、人が投棄した生ゴミをヒグマが食べたりといった問題事例が多く起こりました。また、宿泊施設のゴミ置き場に餌付いた

ヒグマが、利用者のいる日中に繰り返し出没するようになり、駆除せざるを得ない状況も発生しました。

国立公園外のウトロ市街地では、侵入防止柵の内側へヒグマが繰り返し侵入し、合計4頭を駆除せざるを得ない状況が発生しました。ウトロ西地区では例年ヒグマの出没は稀でしたが、今年度はヒグマが海岸沿いに侵入してくる事例が秋を中心に複数回確認され、魚干し小屋に侵入して干し魚を荒らす事例も発生しました。農地では作物被害が町内各地で発生し、計9頭が有害捕獲されました。



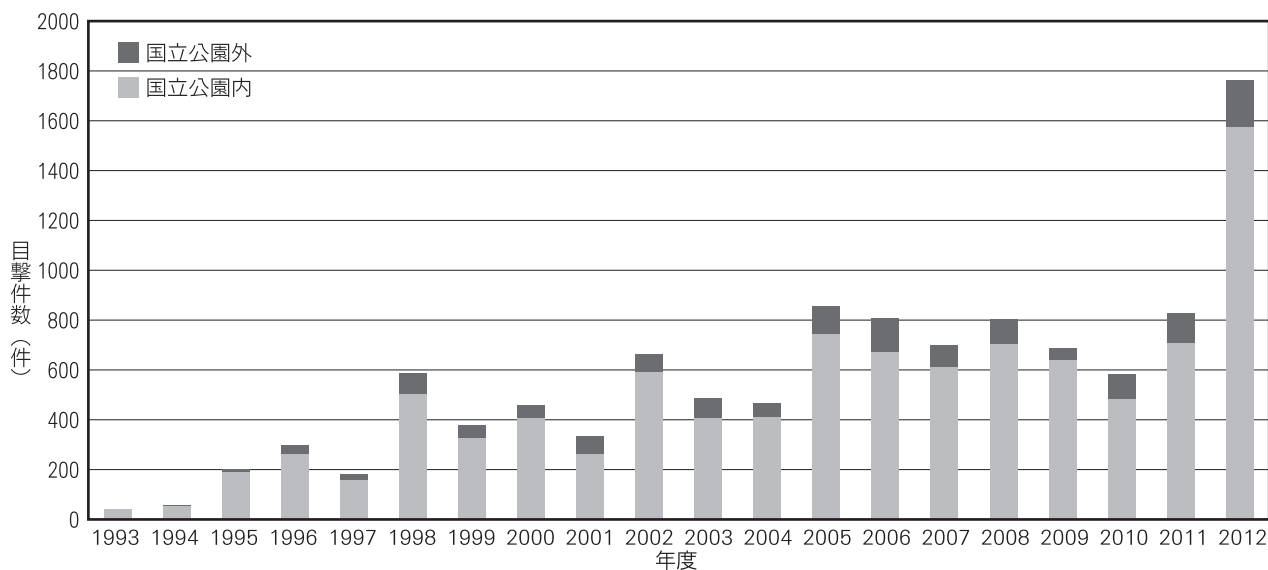
▲ヒグマによって破壊されたゴミ箱

羅臼町

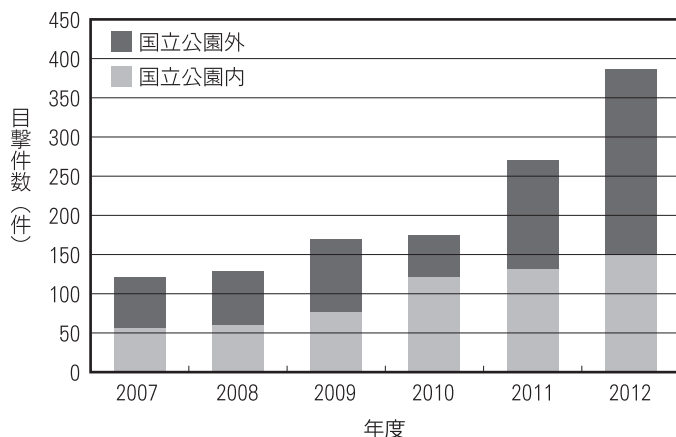
ヒグマ目撃件数は387件、対策活動も329件と過去最高を記録しました。8月から9月には国立公園外の海岸沿いの住宅地にヒグマが次々と出没し、住民の安全確保のためやむを得ない有害捕獲が多発し、過去最高の45頭に及びました。人身事故はかろうじて発生しませんでした。住宅地へのヒ

グマ侵入事例の中には、戸外にあったポリバケツの中の生ゴミが荒らされたり、シャッターが壊されて倉庫の中まで侵入されたりという危険な事例がありました。また、体の大きなオスのヒグマが住宅地に現われ、複数の住民に向かって威嚇突進するという極めて危険な事例もありました。

斜里町のヒグマ目撃件数（年度別）



羅臼町のヒグマ目撃件数（年度別）





▲羅臼の海岸沿いの民家周辺に出没したヒグマ



▲道路に投棄されたゴミ

自然環境の管理対策

自然環境保全のためのパトロール、普及啓発、傷病鳥獣の受け入れ、野生生物の生息調査および保護管理業務を斜里および羅臼の両町と連携して実施しました。

斜里町

ゴミの不法投棄は18件あり、そのうちの多くは食品の包装や容器などで、すでにキツネやカラスに荒らされたものでした。世界遺産地域内でのゴミ捨ても複数あり、利用者のマナーの悪さが目立ちました。また、道路沿いではキツネに餌を与える利用客が絶えず、渋滞すら発生してしまう状況が問題となり、道路沿いに餌やり禁止の看板を設置したほか、道路電光掲示板に餌やり禁止のテロップを管理者に掲示してもらうなどの働きかけを行いました。

野生鳥獣死体の処理件数は36件で、そのうち約半数はシカでした。その他の鳥獣はエゾタヌキ、キタキツネ、トド、エゾクロテンなどの哺乳類とキビタキやホオジロといった小型鳥類でした。また特定外来生物であるアライグマの情報は5件ありました。

傷病鳥獣は鳥類20件、哺乳類9件の計29件を扱いました。1月にはウトロ漁港で溺れるオジロワシを保護した事例もありました。保護した鳥獣の多くは回復状況を確認したうえで再び山野へ戻しましたが、収容後に死亡してしまうケースもありました。

羅臼町

傷病鳥獣の対応は56件あり、斜里町と同様にシカが最多で16件でした。希少鳥類であるシマフクロウとオオワシの対応は各1件ありました。また、特定外来生物に関する情報収集や捕獲作業を行いました。アライグマとみられる目撃情報も寄せられましたが、捕獲するには至りませんでした。

エゾシカのライトカウント調査は、春期と秋期に各5回、ルサー相泊地区で継続実施しました。

町内各地区で実施した計53回のパトロールでは、路上などに不法投棄された弁当ゴミなど複数回発見し、回収しました。



▲斜里で保護されたクロガモ



▲知床岬でのエゾシカの巻狩り

エゾシカ関連業務

知床岬地区では、2011年に設置された大型仕切柵を利用した巻狩りを2012年4月と5月に各1回実施して計85頭のシカを捕獲しました。2013年2月には航空カウント調査で56頭を確認し、その後の巻狩りで13頭を捕獲しました。6シーズンにわたる捕獲事業により、当地区で越冬するシカの数に着実に少なくなってきました。

幌別ー岩尾別地区では新たな試みとして、100平方メートル運動地作業道を利用して積雪のない時期のシャープシューティング（SS）を実施しました。6月に4回実施して36頭、11月から12月に7回実施して33頭を捕獲しました。積雪期のSSは、2012年4月に5回実施して83頭、2013年1月から3月に16回実施して162頭をそれぞれ捕獲しています。また、岩尾別川河口に新たな囲いわなを設置し、1～3月に181頭を捕獲しました。2011年に設置された幌別の囲いわなは、捕獲に関する様々な手法検討を行う場として再活用するとともに2頭を捕

獲しました。

ルサー相泊地区では、前年度に引き続き冬期間のSSを実施しましたが、実施場所である道道が雪崩の危険性が高いと判断されたため通行止めとなり、4回のみの実施で27頭の捕獲にとどまりました。3シーズン目となるルサ川下流の囲いわなでは、2012年4月に17頭、2013年1月から3月に17頭を捕獲しました。

2シーズン目となった春刈古丹の囲いわなでは、わな周辺のシカの生息状況を調査するとともに、12月から3月に56頭を捕獲しました。

2012年度は、知床の4地区で計712頭ものシカを捕獲したことになります。

また、シカ捕獲事業が実施されている知床岬地区をはじめとする3地区においては、シカ捕獲の効果検証のための植生回復状況調査を実施しました。知床岬地区では、顕著な植生の変化が見られ始めています。



▲シャープシューティング



▲ルサ地区に設置されたエゾシカの囲いわな



▲知床岬での植生状況回復調査の様子

▲羅臼での帰化植物調査

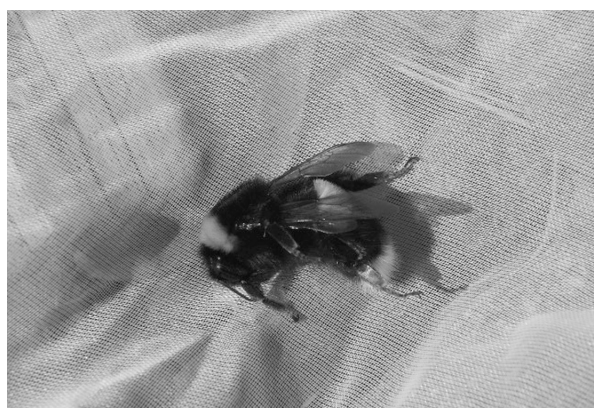
外来生物の調査・対策

知床岬地区において特定外来種とされているセイヨウオオマルハナバチの駆除作業を5月から11月に5回実施し、計54頭を捕獲しました。また、セイヨウオオマルハナバチの捕獲作業時にアメリカオニアザミを発見した際には、鎌による刈取りを随時行い、分布域の拡大抑制に努めました。

羅臼町では、町からの業務委託を受け、羅臼町内に侵入している外来種である帰化植物の実態を調査し、帰化植物マップを作成しました。町内17箇所に設けたモニタリングプロットで63種の帰化植物が出現、うちアメリカセンダングサなどの7

種は、過去の文献では確認されていなかった帰化植物でした。

調査は5月から10月までの5か月間実施し、町内の帰化植物の開花時期や種子散布に関わる情報（フェノロジー）を得ることが出来ました。10月から12月には、「知床・羅臼町の帰化植物展」を羅臼ビジターセンターで開催し、分布図のほか採取した500点以上の植物標本から120点余りを抽出して成果を公表しました。調査の結果は、今後、羅臼町による町内の帰化植物の侵入状況の監視や防除に役立てられます。



▲セイヨウオオマルハナバチ



▲羅臼ビジターセンターでの帰化植物展示

地域住民とヒグマの安全安心共存プロジェクト



人の生活圏への野生動物の侵入を防止し、住民の安全と安心を確保するために2011年度から羅臼町の2カ所を対象として電気柵の設置を進めています。2012年度は、キキリベツ―相泊間のうち約3.8kmに設置し、ヒグマやエゾシカに対する漁業番屋敷地への侵入防止効果や地域に適した設置方法等について検証を行いました。ヒグマに対する効果の十分な検証には時間がかかりますが、シカ

については昆布干し場への侵入が激減したとの意見を一部の漁業者からいただいています。

なお、本業務はダイキン工業株式会社様との協定に基づく羅臼町からの受託事業となっています。



▲羅臼での電気柵設置の様子



▲知床岬での海岸漂着ゴミの調査



▲サケ科魚類の遡上調査

遺産地域調査業務

海岸ゴミ

2009年度に海岸漂着ゴミの回収を実施した知床岬地区において、その後のゴミの増減について調べたほか、ゴミの種別ごとの分布について記録をとりました。2009年の回収後と比べると全体的に大きな変化はありませんでした。また、ゴミは波当たりや風向きによって溜まりやすい場所があることがわかり、今後のゴミ回収のための有益な情報となりました。

サケ科魚類調査

2基のダムに魚道が設置された羅臼町のチエンベツ川でサケ科魚類の遡上数・産卵床数をかぞえ、改良効果について調べました。その結果、カラフトマスについては、明らかな改良効果が見られました。シロザケについては魚道の上流側に遡上する割合がカラフトマスほど高くないという結果となりましたが、魚道の構造に問題があるのかどうかについては明らかになっていません。

科学委員会等運営業務

知床世界自然遺産地域を適切に管理するために、科学的な見地からの行政への助言が科学委員会会議やその付属会議によって行われています。知床財団は科学委員会（7/24 羅臼町、2/23 札幌市）とエゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ（6/23 斜里町、10/25 釧路市）の運営事務局として会議の日程調整、会場準備、資料・議事録の作成などを担いました。



▲知床世界自然遺産地域科学委員会の様子

公益事業 公園利用管理事業

知床五湖利用適正化業務

知床五湖では2011年5月10日から自然公園法による利用調整地区制度に基づく新しい利用システムが導入されました。新制度はヒグマに関するリスク管理体制、観光地における認定ガイド制度など、様々な面で先進的な取り組みとして注目を集めています。知床財団は制度運営の要となる指定認定機関(環境大臣指定)として制度全体の運用を担いました。

制度開始2年目となる2012年度は、例年にないヒグマの大量出没に悩まされ、最も来訪者が多い

8月に地上遊歩道の閉鎖が継続されました。この影響により、利用調整期間中(4月20日から10月20日)の地上遊歩道利用者は45,234人となり、2011年度比の76%にとどまりました。一方、いつでも安全に歩くことのできる高架木道の魅力が広く認知され、シーズンを通じた五湖の来園者数は38万人を超え、2011年度比で11%増加しました。このことから、新制度が安全で安定的な利用に貢献したといえます。



▲知床五湖の高架木道付近に姿を現したヒグマ



▲カムイワッカ湯の滝

適正利用・エコツーリズム検討業務

知床財団は、よりよい公園利用のあり方を目指して様々な協議や試行事業に参加しています。適正利用・エコツーリズム検討会議（知床世界自然遺産地域科学委員会、適正利用・エコツーリズムワーキンググループ、知床世界自然遺産地域連絡会議 利用適正・エコツーリズム部会の合同会議）では、知床エコツーリズム戦略が合意され、地域提案型の利用のあり方やルール作りの仕組みが整備されつつあり、私たちもこうした取り組みに参画しています。知床エコツーリズム戦略の提案に基づき、設置された3部会（「ヒグマえさやり禁止キャンペーン」「知床五湖冬期利用促進事業」「知

床沼野営禁止解除」）すべてに参加しました。

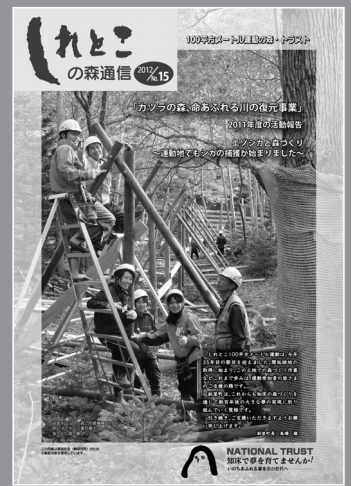
また、知床五湖の利用システムを広く地域の皆様に体験してもらうため、「知床五湖町民還元キャンペーン」を通年実施し、知床五湖を訪れた斜里・羅臼の両町民は、いつでも地上遊歩道を無料で楽しめるサービスを提供しました。その結果、357名の町民に無料で知床五湖の新システムを楽しんでいただきました。

カムイワッカ地区利用適正化業務

カムイワッカ地区は、環境保全と混雑解消を目的に、繁忙期のみ（8月1日から25日、9月13日から24日）マイカー規制を実施しました。知床財団は、マイカー規制の現地連絡調整業務を自動車利用適正化対策連絡協議会から受託し、新設された五湖フィールドハウスを拠点に、バス会社や各地に配置された警備員や巡視員との連絡調整、利用状況の調査や利用者への情報提供、ヒグマ出没時の連絡整理、負傷者への対応などを行い運営の円滑化に努めました。

また、従来「マイカー規制」「湯の沢の利用」と課題ごとに分かれていた協議会が、適正利用・エコツーリズム検討会議の下に統合、一本化されました。知床財団も構成メンバーの一員として協議の場に加わっており、今後の利用のあり方について積極的に提案を行っていく予定です。

公益事業 森林再生事業



▲しれとこの森通信

しれとこ100平方メートル運動森林再生業務

斜里町主催「しれとこ100平方メートル運動」の開始から35年、新運動「100平方メートル運動の森・トラスト」として原生の森の再生に向けた取り組みが始まり15年が経過しました。この知床の森を守り育てる取り組みの中で、知床財団は、森づくり作業やしれとこの森交流事業など100平方メートル運動に関わる現地業務を担っています。

（１）森林再生作業

森づくり作業は5年毎の回帰作業方式としています。2012年度は、3巡目の回帰作業の5年目にあたり、岩尾別台地の第5区画を中心に作業を行いました。

森づくり開始当初に設置した防鹿柵の木製の柱などは、腐食や劣化が進み交換の時期にきています。そのため、運動地各地の防鹿柵の改修作業を順次進めています。また、苗畑での広葉樹の苗木育成や植樹、樹皮保護ネットのメンテナンス作業などを行いました。このほか、2010年に取得した運動地に防鹿柵および作業道を新たに設置しています。この運動地は、知床自然センターや100平方メートル運動ハウスなどに隣接していることから、森づくりを行うだけではなく、運動と森づくりを伝える場所として活用していく方針です。

（２）しれとこの森交流事業

森づくりの現場と運動参加者をつなぐ交流事業では、「第33回知床自然教室」（7月30日から8月5日、参加者37名）、「第16回森づくりワークキャンプ」（10月30日から11月4日、参加者15名）、「第16回しれとこ森の集い」（10月14日、参加者100名）の企画・運営を行いました。

なお、2012年度は運動開始から節目の35年目にあたるため、「しれとこ森の集い」はしれとこ100平方メートル運動35周年事業の一環として開催されました。また、5泊6日の日程で森づくり作業に打ち込む「森づくりワークキャンプ」は、リピーター参加者が多く、交流事業として、また作業への貢献の面でもなくてはならないイベントになっています。



▲森づくりワークキャンプ



▲2010年に取得した運動地に設置した防鹿柵



▲岩尾別川の河川環境改善作業の様子

（３）森林再生専門委員会議運営

森づくり作業の方針や計画は、動植物の専門家と地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論され、その方向性などが定められています。2012年度は3巡目の回帰作業の最終年（5年目）にあたることから、2回の会議が開催されました。知床財団では、これまで5年間の活動の成果と課題をまとめるとともに、2013年度以降の森づくりの具体的な方針や計画案を斜里町と検討を重ねながら立案しました。9月と12月の会議では、今後の森づくりの方針や計画案について話し合わせ、次期5年間の回帰作業方針が定められました。

（４）運動地広報企画

100平方メートル運動の広報誌『しれとこの森通信No.15』（A4判カラー8ページ）の企画・編集作業を行いました。また、知床財団ホームページのブログにおいて日々の森づくり作業の様子を発信しているほか、斜里町の「しれとこ100平方メートル運動ホームページ」への掲載用写真の提供、マスコミ等の取材を積極的に受け入れています。

（５）河畔林と河川の自然再生業務



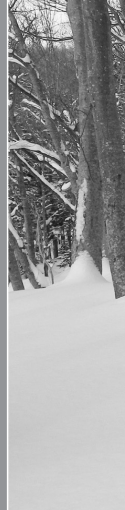
岩尾別川沿いの河畔林の復元と河川環境の改善への取り組みの一環として、岩尾別川周辺で掘り取ったカツラの苗木約300本を苗畑に移植、育成に着手しました。また、2011年度に設置した防鹿柵の拡張作業を行い、柵内の面積を約2倍としました。カツラの移植や柵の拡張作業は、支援をいただいているダイキン工業株式会社様の社員ボランティアの方々とともに実施しました。

河川環境の改善に向けた取り組みでは、サケ科魚類の生息、産卵環境改善を目的に、川の中に大きな石を配置する作業などを行いました。しかし、11月には大雨による増水が発生し、せっかく配置した岩石の一部が流失、埋没する状況も起こりました。今後も状況把握に努めるとともに、増水の危険を検証し、2013年度以降の作業に活かしていく予定です。

なお、本業務は、ダイキン工業株式会社様との協定に基づく斜里町からの受託事業です。



▲ダイキン工業株式会社様の社員により苗畑に移植されたカツラの幼樹



しれとこ100平方メートル運動普及推進業務

知床財団は、斜里町主催「100平方メートル運動の森・トラスト」の安定的な継続と発展を図るため、運動地公開を含めた運動の普及と推進に、運動の現地業務を担っています。本業務は、知床財団が斜里町と連携を図りながら独自事業として取り組んでいるものです。

（１）普及推進業務

運動の趣旨に賛同する企業や団体、教育機関を対象に、運動地を歩きながら100平方メートル運動や開拓の歴史などを紹介し、実際の森づくりの作業も参加者に経験してもらう運動地公開プログラムを行いました。地元の斜里高校をはじめ、東京都立南多摩中等教育学校の生徒や日本赤十字北海道看護大学の学生など約220人が知床の森を訪れ、運動と森づくりを体験しました。なお、初めての受け入れとなった東京都立南多摩中等教育学校の研修は今後も継続していく予定です。

また、4泊5日の合宿イベント「知床森づくりの日」を3回開催しました。計26名の参加があり、参加者は作業に汗を流しました。冬期は知床自然センター周辺に「スノーシュー・歩くスキーコース」を設置し、利用者に運動と森づくり作業を紹介する地図を配布して普及と公開に努めました。



▲学生による森づくり体験



▲「スノーシュー・歩くスキーコース」の設置作業



▲岩尾別川での魚類の生息状況調査

(2) 岩尾別川河川調査及び生物相復元



岩尾別川流域での各種作業の成果を検証するため、河畔林と河川環境の調査を行っています。2012年度は、同河川に設けた定点ポイントにて、魚類の生息状況と河川構造の現状を把握する調査を行いました。このほか、設置した防鹿柵内外の植生調査や河川周辺の鳥類調査なども行っています。

また、生物相復元については、カワウソが生息しているロシア・サハリン州を訪れ、カワウソの生息環境を確認したほか、漁業とカワウソの関わり合いなど社会的なカワウソの位置づけについて海外事例の収集に努めました。

なお、これらの取り組みは、ダイキン工業株式会社様との協定に基づく知床財団独自事業として、知床博物館や東京農業大学などの外部の研究者と連携を図りながら進めています。



▲サハリンでのカワウソ生息状況確認調査の様子

収益事業

販売・有償貸出

オリジナル商品の開発

知床財団の活動を広く知ってもらうことを目的に、オリジナル商品の開発を行いました。2012年度は、職員撮影の写真で作ったカレンダーや、知床を代表する生き物（ヒグマ、シャチ、シレットコスミレ）がデザインされたブローチを新たに作成、販売しました。また、株式会社フェニックス様のご厚意により商品価格の10%が知床財団への寄附金になるオリジナルTシャツのデザインを一新しました。

オンラインショップおよび通信販売

2011年5月より開設しているオンラインショップ「コムヌプリ」の運営、管理を行いました。135件、1,012,071円の売上があり、そのうち765,000円、96口（個人年会員 新規登録13件、更新申込80件、および終身会員3件）の会員登録を受け付けました。

この他に、電話やファックス、電子メール等で注文を受ける通信販売の売り上げは344,184円でした。

レンタルサービス

知床自然センターで長靴・双眼鏡の有料貸出を行いました。来館者の少ない冬季には、入館促進および来館者の満足度向上のために株式会社ユートピア知床様と共同で、長靴・スノーシューの無料貸出を行いました。2012年度の貸出件数は939件、うち冬期の無料貸出件数は457件でした。



▲オリジナルカレンダー2013

ヒグマ撃退スプレー・フードコンテナの貸出

羅臼岳への登山や知床半島先端部トレッキングへの携行を推奨しているヒグマ撃退スプレーのほか、食糧保管に必要となるフードコンテナの有料貸出を行いました。貸出の際には契約内容や使用方法、ヒグマとの危険な遭遇を回避する方法につ

いてスライド画像を用いて20分程度のレクチャーを行いました。ヒグマ撃退スプレーの貸出件数は39件、フードコンテナの貸出件数は6件でした。

羅臼研究支援センターの維持管理

施設の維持管理と利用受付をはじめとする運営を担いました。利用者は、野生生物の専門家や大学院教授、大学院生、知床財団のインターンやボランティアなどで、のべ91人、818泊の利用がありました。

研修実習の受入

知床財団が担う野生動物保護管理、調査研究や公園管理の実績を反映した研修プログラムとして、北大獣医学部生や酪農学園大学環境システム学部生の研修などを受け入れました。他にも、道内外の各種団体からの講演依頼、知床でのレクチャー対応、行政視察対応を通じて、知床の価値を広く伝える活動を行いました。



▲北海道大学獣医学部の研修

収益事業

研修・講演・視察対応等受入実績

講 演	そうや自然学校
	東京農業大学 生物産業学部
	川湯パークボランティア
	阿寒観光協会
	日本大学
	NPO法人 霧多布湿原ナショナルトラスト
	北海道立旭川南高等学校
	西武学園文理小学校
	日本赤十字北海道看護大学 看護学部1年生
	北海道大学 獣医学部
	アイヌ民俗博物館
	学校法人 私立専修学校 各種学校連合会北見支部
	電機連合
	オホーツク放射線技師会研修会
	小学生のための世界自然遺産プロジェクト ユネスコキッズ（江東区立越中島小学校5年生）
	北海道高等学校ユネスコ連絡協議会
	北見市市民環境部「こども環境ウォッチング」
	小学生のための世界自然遺産プロジェクト ユネスコキッズ（知床）
	アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い
	北海道国有林の森林保護・保全取組報告会
視察対応	根室地方PTA研究大会
	ESD・ユネスコスクール研修会
	福島県喜多方市議会
	鳥取市議会
	山梨市議会
研修・実習	鉾田市議会
	広島県議会民主県政会
	北海道大学 獣医学部
	酪農学園大学 環境システム学部 生命環境学科
	北海道立小清水高等学校
	北海道立斜里高等学校
	東京都南多摩中等教育学校
	札幌市青少年女性活動協会
	札幌市とその他関係機関

財団管理運営事業

財団管理運営業務

2011年4月1日より公益財団法人に認定されてから2年を終えました。理事会は、5月に2011年度事業報告・決算および2012年度第1回補正予算などについて、10月に代表理事の職務執行状況及び財務執行状況などについて、12月に2013年度第1回補正予算及び中間決算報告について、3月に第2回補正予算及び2013年度事業計画・予算等について審議し、年5回開催しました。定例評議員会は5月に開催し、事業報告・決算等について審議しました。

代表理事と事務局により年2回以上の開催が義務づけられている運営会議を開催しました。

役 員

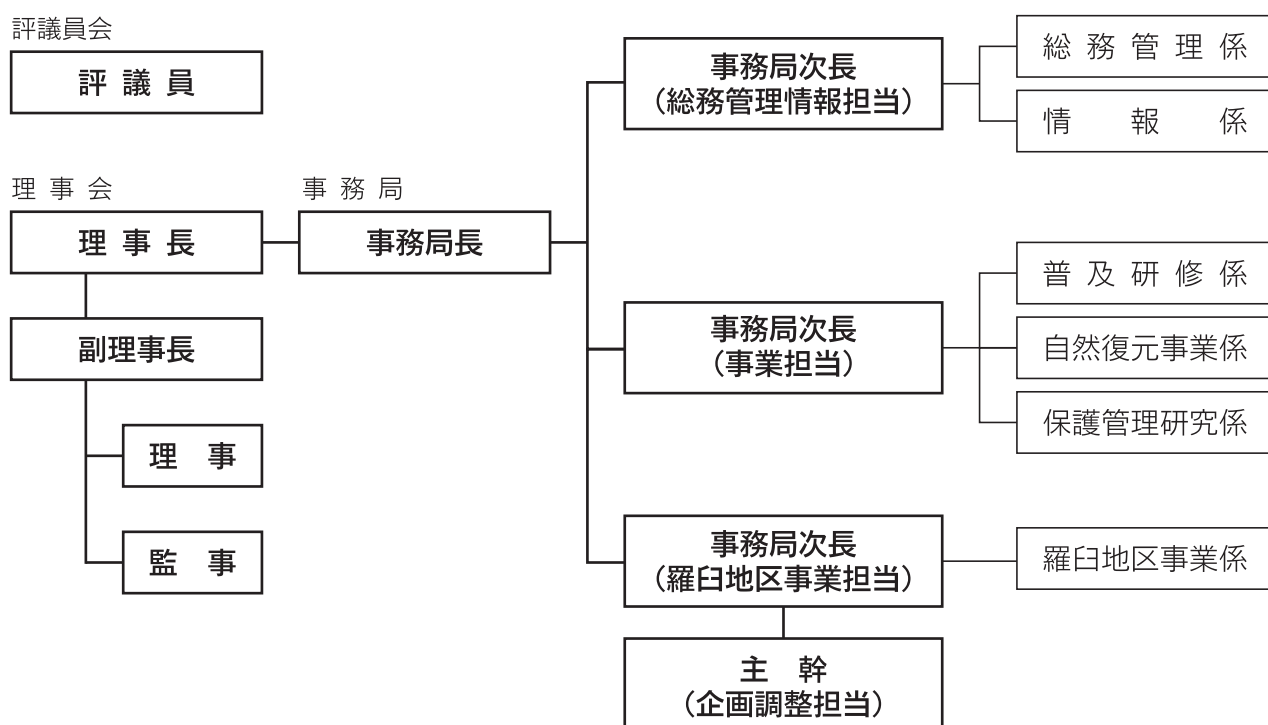
理 事 長	関 根 郁 雄
副理事長	辻 中 義 一
理 事	佐々木 富美男
〃	佐々木 泰 幹
〃	石 田 順 一
〃	北 雅 裕
〃	大 瀬 昇
監 事	中 川 元
〃	宮 腰 實
評議員長	高 橋 一 三
評 議 員	吉 野 弘 志
〃	木野本 伸 之
〃	遠 山 和 雄
〃	金 澤 裕 司
〃	吉 野 英 治
〃	小 川 雅 勝

組 織 概 要

名 称	公益財団法人 知床財団（2011年4月に名称変更 旧名称 財団法人 知床財団）
設 立	昭和63年（1988年）9月23日
設 立 者	斜里町・羅臼町
基本財産	4,500万円
所 在 地	〒099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地 知床自然センター
目 的	この法人は、知床半島及びその周辺地域の自然環境に関する調査・研究、自然保護の普及啓発等の事業を行い、もって広く自然保護の保全と利用の適正化に寄与することを目的とする。
事 業	(1) 野生動植物の調査・研究 (2) 自然保護の普及啓発 (3) 自然保護に関する諸団体との提携 (4) 自然環境の保全管理及び公園施設等の管理運営受託業務 (5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業
職 員	31名

2013年4月末

【2012年度の組織体制】



知床の価値ある自然を 私たちと一緒に守りませんか

<http://www.shiretoko.or.jp/supporter/kojin>

「どなたでも知床の自然保護活動に貢献できます！」

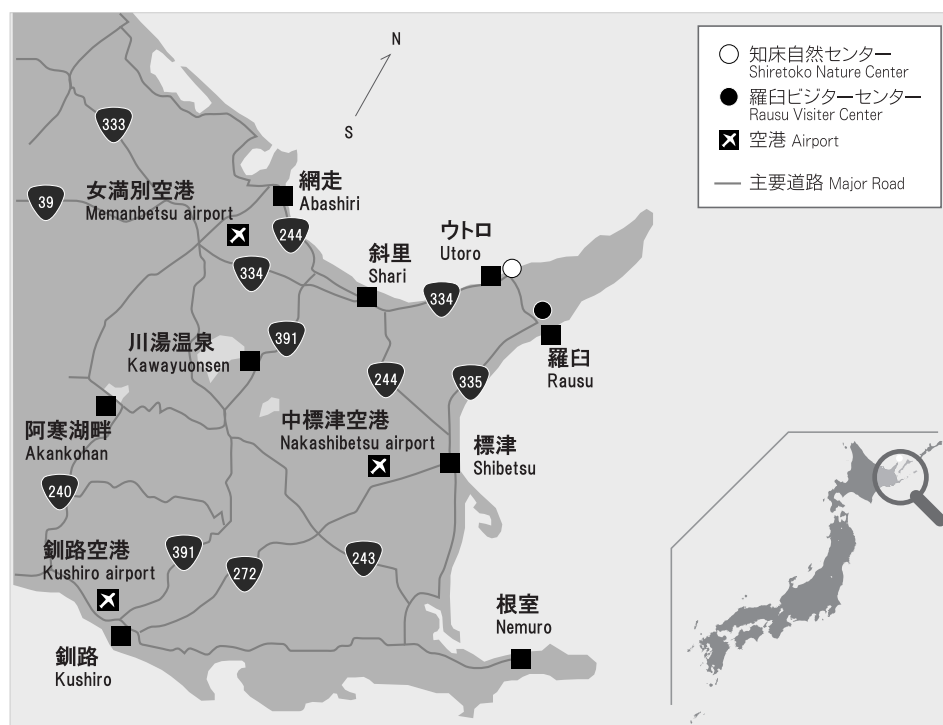
知床の自然を未来へ遺していくためには、皆様の継続的な支援が不可欠です。
皆様が知床の自然を思う気持ちを私たちに託して下さい。

知床財団の賛助会員制度

会員になると、知床自然情報誌SEEDSや刊行物を定期的にお届けする他、知床自然センターの映像展示館の入館料免除など、各種特典があります。

個人年会員	5,000円/年	法人年会員	20,000円/年
個人終身会員	100,000円/終身	法人特別年会員	100,000円/年
寄 附	おいくらからでも受け付けています。 (5千円以上のご寄附をいただいた方に本誌を1部お送りします。)		

●振込先 郵便振替 02750-2-37694 ●加入者名 公益財団法人 知床財団





REPORT 2012

2012年度活動報告書

